

日本基督教団 宗教改革500周年記念礼拝
2017年6月22日(木) 13:30-16:00 富士見町教会

説教：「わたしが命のパンである」

ヨハネによる福音書 6：34-40

大住雄一牧師 (東京神学大学学長)



私たちはどうしたら神の前に義とされるのでしょうか。つまり、神の前によし、とされるのでしょうか。平たく言えば、どのようにしたら、天国に行くことができるのでしょうか。何か功德を積まなければならないのでしょうか。あるいは、教会のために、何か意味あることをしなければならぬのか。

主イエスに教えを乞いに来たお金持ちが聞きました、「主よ、永遠の命を得るにはどうしたらいいのでしょうか」。これは私たちの、究極の問いであります。そして、宗教改革の根本的な問いでありました。あのお金持ちに対して、主イエスの答えはとて厳しかった。「知っているはずだ。殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え」。あのお金持ちは答えます、「主よ、それは小さい頃からみんな守ってきました」。どうしたらいいんでしょう。私たちは、主イエス・キリストが「こうしたらよい」と仰ったことを、厳しくてできない、と思っています。殺すな、盗むな、姦淫するな、そのことは小さい頃から守ってきたけれども、果たしてそれで永遠の命を得られるのかどうか、わからない。

宗教改革はカトリック教会の縛りを脱しようとしたので、しばしば誤解されているところがあります。それは、私たちの人間性の解放であった、ということです。それは誤解だと思ふ。私たちの人間性の解放を、宗教改革が目指したのではありません。宗教改革が目指したことは、そうではない。私たちが永遠の命を得

るために、神の前に義とされるために必要なことは何か、それを問うた。そして、教会に何らかの貢献があれば救われるという教えに反して、それを批判したのです。

必要なのは、私たちの悔い改めなのだ。罪の悔い改め、それだけが、私たちが神の前に義とするのだ。そう言ったのです。

皆さん、宗教改革のきっかけとなった文書をご存知だろうかと思う。『95箇条の提題』と言われているもので、1517年、今から500年前の10月31日に一あるいは11月1日だという説もありますが、最近では10月31日だと言われていています。マルチン・ルターがヴィッテンベルクの教会の城門に貼り出したと言われる文書であります。これは、「贖宥の効力を明らかにするための討論」と呼ばれております。当時、教会は贖宥状を発行して、その贖宥状を買って、つまり、それを買うことによって献金をする者が天国に行けるのだ、と言った。そんなバカなことがあるかと、『95箇条の提題』を出したのがルターであります。これはルターが思ったよりも大きな反響を呼びました。お金の問題が関わっていたからだと言われますが、その第1条に何と言っているか。「95箇条の第1条、私たちの主であり師であるイエス・キリストが悔い改めよと言われた時、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることを欲したのである」。何と宗教改革のきっかけとなった文書の一番最初に、私たちに必要なものは悔い改めだけだ、と言ったのです。しかも、生涯にわたって行わ

れる悔い改め、それだけが私たちに必要なことだと言いました。

今日の礼拝、覚えておいででしょうか。最初に、悔い改めの祈りをいたしました。岡村先生と相談をしていて、これは絶対に必要だということで、共に悔い改めの祈りをすることにしました。岡村先生は教団の総会の礼拝の中でもこれをなさった。「是非やろう。いや、そうしなければ宗教改革の意味がない」と思って、この悔い改めの、共に祈る祈りをしたのです。

一緒に祈るということはとても大事なことです。これが、私たちが礼拝に出る時の条件であるからです。悔い改めを共にする。一人、カトリックの教会では一人でやります。告解というものがあって、司祭が「汝の罪、赦されたり」と宣言しなければいけない。そのことによって初めて、礼拝に出る資格が生まれます。それを、宗教改革の教会は大事なことだと思いながら、廃止しました。その代わりにどうしたかということ、礼拝の中で、共同の悔い改めの祈りをしたのです。私たちは、悔い改めることなしに、しかも、それを共同で共有することなしに礼拝に出る資格がない。いや、私たちの礼拝はそもそも共同のものですけれども、これができるためには、我々が悔い改めを共有していなければならない、ということになったのであります。そして、ルターはこの『95 箇条の提題』の中で、いの一番に「悔い改めよ、というのは、信じる者が全生涯にわたって悔い改めをすることを、主は欲し給うたのだ」、と言いました。

悔い改めは、どのようにしたら可能になりますか。心を込めて自分をいじめたら、それで悔い改めになりますか。そうではないはずだ。悔い改めに必要なのは、神様の側からの赦しであります。赦されるから、悔い改めることができます。そして、律法も同じであります。神が赦してくださるから、律法は律法になり得る。福音がなければ、律法はない。それゆえに、プロテスタント教会は、福音主義と呼ばれる。福音からすべてが始まるからです。

今、私たちは、主イエスが「私は命のパンだ」と仰る御言葉に向き合っています。福音がなければ悔い改めもない。その福音は、どういう内

容であるかが、示されています。主イエス・キリストは仰いました。「私が命のパンである」。これは実は、ユダヤ人たちとの、すれ違った討論の話を前提にしています。主イエスは、天から降ってきたパンのことを仰います。それが、イスラエルを養う。イスラエルは、神から恵まれるのでなければ、生きることなんてできない。養われない。そこで、ユダヤ人たちは問うのです。「そのパン、いつも与えてください」。

主イエスと人々の討論はしばしば、すれ違いますが。このヨハネの福音書に報告されている話もそうです。あのサマリアの女と主イエスが話し合われた、その時もすれ違いますが。サマリアの女は、水を汲みに出かけてきます。そこで、主イエスが、「水をくれ」と仰る。「ユダヤ人であるあなたが、サマリア人の私に、水をくれと、仰るのか」。すると、主イエスは、「私が誰であるか、わかったら、むしろ、私が与える水こそが、あなたのために永遠に渇きを癒やすものになる」と答える。すると、女性は言うのです、「水を汲みに来なくてもいいように、その水をください」。ここでずれます。日常生活に帰ってしまう。「水を汲みに来なくてもいいように、その水をください」。そのことをイエス様は仰っていない。信仰をもって、主イエスを受け入れる、ということ仰った。今、ユダヤの人たちもそうです。「永遠の命を得るために、そのパンをください」。主イエスは、お答えになります。「私が、そのパン、命のパンです」。ここは、日本語の訳で「私が」と言ったのはその通りでありまして、「どこに永遠の命があるか。私がそれだ」と仰った。つまり、聞いた者にとって、これは、本当は衝撃であったはずなのです。「私が命のパンだ。私を食べなければ永遠の命はない」と仰った。そんなことができるのでしょうか。当然、ここでは、信仰のことが言われております。信じて、主イエスにつく者が、永遠の命を得る。イエス・キリストと一つになること、信じた者にはそれができる。そのことによって、永遠の命を受けることができる。

しかし、主イエスはこの議論のずれをさらに問題にされます。「あなたたちは、私を信じない」。私たちは、これを他人事だと思っていま

すけれども、どう考えたらいいでしょう。「私のところに来たあなたたちも私を信じないだろう」。どうしたらいいでしょう。あの、主を訪ねてきたお金持ちも、信じませんでした。「どうしたら永遠の命が得られますか」。自分が幼い頃から守ってきた律法の言葉を言われたのに、主についていきませんでした。なぜついていけなかったのか。どうでしょうか。主イエスは仰るのです、「あなたにはなお一つ、欠けたものがある」と。「あなたの財産を全部売って、貧しい人に施しなさい。そして、私についてきなさい」。もしも、貧しい人に施すだけならば、彼はできたはずですが、それでいいんですか。貧しい人に施す、その先が、彼にはできなかった。主イエスについていくこと。

彼がお金持ちであるのは、神様に愛されているしるしです。「それでいいよ」と言われれば、彼には、救われるための恃みとするものがちゃんとある、ということです。それを全部手放して、主イエスについてこいと言われて、彼はできなかった。だから、主イエスは仰ったのです。

「金持ちが天国に行くのはむずかしい。金持ちが天国に行くよりは、針の穴をらくだが通る方がやさしい」と仰った。そんなばかな。弟子達は驚きました。この人こそ、天国に行く手立てを充分に持っているはずなのに、そういう人が天国に行くのはむずかしい、それよりもらくだが針の穴を通る方がやさしい。びっくりした弟子たちに、仰います。「神には何でもできる」。乱暴な言葉でしょうか。そんな無体なことを言われて、お金持ちが天国に行くよりも、針の穴をらくだが通る方がやさしいとまで言われて、驚いた弟子たちに、「神には何でもできる」と仰る。ここには大事な点があります。自分が恃みとするものを捨てて、どうして救われるでしょう。主イエスの仰りたかったことはですね、神にしかできない救いを受けなさい、ということです。神には何でもできる、そうかもしれない。そういうことが、乱暴に聞こえるかもしれないけれど、そうじゃない。あなたが、自分の恃みを捨てて、そして、主に従ってきなさい。そうすれば天国に行ける。あなたの持っている自分の恃みによって天国に行くのではなくて、

神の力によって天国に行けるのだ。そう主イエスは仰った。

今、主イエスは、これが神の御心だと仰るのです。私たちは、問いました。どうしたら父なる神の御心に沿うことができるんですか。どうしたら神の前に義とされるんですか。その答え。神はあなたたちを救うということ、一人も失われずに復活させるということが、神の御心なのだ。驚くべきことです。私たちは自分がなんとかして、救われようとする、救いにふさわしいものになろうとする。けれども、主イエスは仰るのです。あなたの恃みではなくて、神の御心を考えてごらんください。神の御心はあなたが救われることなのだ。終わりの日に復活することなのだ。終わりの日に復活するなんてどうやってできましようか。でも、それが、神の御心だと仰る。

神の前によしとされるために何をしたらいいのか。それは、神の御心を行ったらいいのです。神の御心は、律法を行うところにはない。そうではなくて、ただ悔い改めて、「自分の中には何もありません」という悔い改めをもって主の前に立つこと、そうすれば、神の御心が実現する。私たちの考えではなくて、神の御心が実現する。そのことを主は仰るのであります。

宗教改革の展開というのは、ただの人間主義が成立したということではない。そうではなくて、宗教改革は悔い改めの宗教であります。主の前に立つのには、悔い改めしかないのだ。自分の中には何にもない。神様が私を救ってくださる以外に、何にもない。そのことに気がついたのが、宗教改革です。カトリックの教会は、人間が何をすべきか、贖宥状を買いなさい、教会に献金をしなさい、それは大事なことももしれないけれども、「それで救われる」と言ったらおしまいです。そんなことではない。

神の御心は、私たちが教会のためになる何かをすることではなくて、一人も失われなくて終わりの日に復活すること、それが御心なのです。主は仰せになります。「父が主イエスに与えられた人を復活させる」、これが、神の御心です。主イエスはそうやって、御自分に与えられた人たちを、投げ捨てることはしない。この約束が

私たちに与えられているのです。

宗教改革は人間が主人公になったのではないのです。神が主人公になっている。おかしいことだと思われるでしょうか。それまでの教会は神が主人公だったのではないですか。そうではない。それまでの教会は、どこかで人間が主人公になっていた。そうではない。人間が何かをしたから、贖宥状を買ったから、救われるのではなく、神の業が行われるから救われるのです。神の御心が成るから。

ここで「選び」というわかりにくい言葉が実は出てくるのです。主が選んでくださった。私が何かをしたからではなくて、主が選んでくださった。主が選んで、御自分の元に召して、そして、御自分のものとなさり、主イエスに委ね給うた私たちです。神が主人公です。その神に委ねられたものを、主は、捨てることはないと言った。この神の御心を行うために私は来たんだとまで、仰った。

主イエスはこの世に来られて何をなさったのですか。私たちのために命を捨てたと言われている。主イエスが命を捨てたこの私です。私が救われるために、それが父の御心であって、その御心を行うために、主イエスは命を捨てた。神の選びとは、そういうものです。私たちが主人公ではない。神が選んでくださっている。私たちに何の功もないのに、救うことにしてください。それによって私たちはここにいます。神の選びとは、そういうものです。

終わりの日を望み見て、主イエスはこれを仰います。終わりの日に、あなたたちを復活させる。それが御心だ。終わりの日に復活するために、永遠の命を得るために、どうしたらいいんでしょうか。あの金持ちは聞きました。それは私たちの問いでもあるけれども、終わりの日に復活させられて、永遠の命を得るのは、あなたの望みではなくて、神様の望みなのだ。そのことを信じて、その日を望み見て、悔い改めて生きる、生かされるということ、それが、神の御心であります。終わりの日まで、一人も失われないという保証を、私たちは、主イエスによって与えられています。私たちのために命を捨ててくださった方が、終わりの日まで、一人も失

われないと仰った。

今日、私たちは聖餐の食卓を共にします。これもまた、共にするということが大事です。悔い改めを共にすることで始まったこの礼拝は、食卓を共にすることで、満たされます。今日、私たちは終わりの日を望み見て、復活の命を与え給うイエス・キリストを味わうのであります。私たちの命であるパンだ、主イエスは仰いました。そういう風にして御自分を裂き、差し出してくださいましたイエス・キリストを、信仰をもって今日、受け取って、味わうのであります。

信じた者は失われることはない。神の約束です。私たちの確信ではありません。神の約束でございませぬ。信じた者は失われることなく、永遠の命を受ける、そのために主イエスは命を捨ててくださった。それが神の御心なのであります。どうしたら神の御心を行うことができるのか。それはもはや、私たちの問題ではなくなったのです。どうしたら神に従えるのか。私のすべきことではない。神が、それを御心とされて、神の事柄になった。悔い改めを、神が私たちに備えてくださいます。そして、悔い改めて、神の前によしとされて、生きるのです。その生き方は、その命は、神がそのようにしてくださいました。これは私の心だと仰ってくださいました。その神の事柄である救いを、私たちは受けて、主イエスを送ってくださった神を信じるのであります。

祈りましょう。天にいらっしゃいます、父なる御神様、私たちの事柄ではなく、あなた様の事柄として差し出されている救いを、私たちが信じて、いただいて、今日味わうことができるようにさせてください。この祈りを、主イエス・キリストの御名によって御前にお捧げいたします。アーメン。

